

小学校「外国語活動」における英語習得の実態

堀尾, 邦子

<https://doi.org/10.15017/1931924>

出版情報 : Kyushu University, 2017, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名 : 堀尾 邦子

論文名 : 小学校「外国語活動」における英語習得の実態

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

現在、日本の公立小学校で実施されている「外国語活動」では、5・6年生を対象に、週1時間、年間35時間、小学校2年間で70時間の体験活動が行われている。一見楽しく活動しているようだが、教科ではないので、体験活動をすることが目的で、言語学的な到達目標はなく、暗記する義務もないうえに英語習得能力については明らかにされていない。児童の英語習得の実態に関する研究報告は、非常に希である。英語習得が外国語活動の目標でもなく、英語の定着を求められている訳でもないため、先行研究が少ないのは当然のことである。そこで、70時間の体験活動を通して身に付けた児童の英語習得状況を明らかにしようと始めた研究である。児童が楽しく活動しながらも、少しずつ習得している英語能力について、言語学的な視点から論述することにした。

まず、英語音声・音韻について、約30名の児童を対象に調査した。児童の発話する英語音声をグラフ化し、音声波形とピッチ曲線をnative speakerであるALT (Assistant Language Teacher) のものと比較し、習得状況を判断する。また、音韻についても、英語の閉音節や二重母音、子音連結について調査した。その結果、児童の興味関心や能力・言語環境により個々に違いはあり、習得過程は様々ではないが、各自、少しずつ英語音声に慣れ、発話できるようになっていることが判明した。

形態素は、小学校で児童が学ぶものは、量も質も非常に限られたごく僅かなものであるが、その実態について分析してみた。不定冠詞も名詞複数形も日本語には無いものであり、児童の体験活動も非常に少ない。文法的な説明もなくDVDを見てALTの英語を聞いて体験するだけであるが、それでも、児童は形態素について、少しずつ理解できるようになっている。

統語については、いわゆる文法的なことは小学校英語では取り扱わないが、児童は国語で文に関する統語的な考え方は学んでいる。また、日頃の授業の中で、語彙や句・文について学び、体験し、無意識の内に統語的な学習を経験している。特に、句や文について、児童の聞き取り・意味理解と英語表現力を調査した。その結果、児童は、学習した範囲である程度、英文の聞き取りや意味理解ができ、英文を表現することもできていた。特に、児童に身近な句や文の聞き取りも意味理解も、学習を通して確実に進んでいると捉えられる。

語彙では、学習前から知っている語彙、特に発音の聞き取れる借用語はよく理解できていた。小学校英語で学習する語彙は非常に少ないが、個人的な違いはあるものの、児童はそれぞれに理解できる、また、発話できる語彙が少しずつ増えてきている。本活動では児童に身近な語彙を取り扱っていることもあり、親しみのある語彙はもとより馴染みの薄い語彙でも、一度学習すれば、少しずつ音声を覚え意味理解ができるようになっている。音声を聞き、意味理解ができ、発話ができるようになると、児童の語彙への理解度は進むものである。

外国語活動の目標に、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」とあるように、コミュニケーション能力を育てることが本活動の中心的な課題である。しかし、児童のコミュニケーション能力の育成については、指導者は、あまり意識していないと考える。授業の実態として、英会話の練習に関する活動風景を見ることはあっても、児童各自が、自由に ALT と会話をする様子を見ることはほとんどない。教師は、コミュニケーション能力の素地を、英語が話せることと解釈しているようだ。そこで、実際に児童に ALT と共に会話をしてもらいその様子を録画し、その記録を基に詳細に分析してみた。その結果、児童は限られた英語能力だからこそ、首振りや笑顔、友達との相互の助け合い、素早い反応や熟慮、英会話中だが日本語にコードスイッチングしてでも話したい、意思疎通を図りたいという、いわゆる方略能力を駆使して、一生懸命英会話に取り組んでいる姿が見られた。会話記録の詳細については、本論文に記述しているし、参考資料としても添付している。

一見「楽しいだけで、学習か遊びか分からない活動」とよく言われる「外国語活動」であるが、活動を通して、音声・音韻、形態素、統語、語彙、コミュニケーション能力における英語習得は、確実に、少しずつ、身につけてきている状況が、本研究を通して判明した。

現在は、児童が楽しみながら活動することで、自然に習得できている英語能力であると考ええる。

今後、教科となり、到達目標が明確に掲げられ、研修も受けていない、指導に自信のない担任教師が 1 人で英語を指導することになると、授業形態は随分変わってくると考えられる。それでも、授業を通して児童が興味関心を示し、楽しく活動する中で、個に応じた英語習得が進むことを願ってやまない。